

第八講 歴史学と文化史学

【前回のレポート課題】「歴史は実体か、それとも表象か」

このレポート課題に諸君はかなり戸惑ったことと思う。歴史は実体であると同時に表象でもあるというレポートがいくつか見られたことから窺い知ることができる。また中には「実体」「表象」それぞれの言葉の意味を辞書で確認してからレポートに臨んだ人も何人かいた。言葉や定義を確認しながら、慎重に考察していこうとする態度は重要である。

課題の問い方が「実体」か「表象」か、という二者択一的な設定になっていたために、それに合わせたレポートが多くなってしまった。しかしこのような問い掛けはスコラ学的だと指摘した上で、設定そのものを拒否するというレポートもあり、課題をそれぞれがよく考えて、自らの判断によってレポートを書こうという姿勢は非常に明確だった。

二者択一的課題となってしまうために、どちらかという歴史を「実体」よりは「表象」と捉えるレポートが多かった。

歴史を「実体」と主張する論拠は過去に起きた事件・出来事が事実としてあり、その事件・出来事を記録した史料に基づいているということに求められている。その記録について「実体」論を主張するレポートは歴史が実体でなければそれを記録するという行為そのものが成り立たないではないか、と指摘している。また城郭や土器などがモノとして我々の目の前に残されているので実体であることを疑う余地などない、というレポートもあった。

それに対して歴史を「表象」とするレポートは「勝者の歴史」という言葉を引用して、事件・出来事を記録した史料の偏り、部分的証言、歪曲、誇張などを指摘する。記録という行為についても事件・出来事の総体を記録に残すことは出来ないで、どうしても部分的にならざるを得ない。そしてその部分的な記録を、後世の研究者が利用するということから生じる過去からの乖離は避けられない。その際、史料を利用する歴史研究者の主観、解釈、価値観などを媒介して再構成された歴史は過去そのものではなく、過去についての「表象」でしかないと言うのである。歴史に働く現代

の便宜性という要素を強調するものもあった。

しかし過去があったという事実は否定できないという思いが一方にあり、再現された過去はその元となった過去とは同一ではないという認識が他方にあり、そこに強い戸惑いを示すレポートも散見された。言語論的転回を用いて、「言葉」が先にあり、その「言葉」に基づいて「事実」が集められ、記録される史料の問題点を指摘するものもあった。

何れにせよ、明快な答えのない、どちらかと言えば自ら答えを考え出していかなくてはならない課題であったために、どのレポートも苦心した跡をよく示していた。

【レポートの課題】 文化史とは何か？

歴史学におけるギルド体制の伝統

日本の大学：ドイツのベルリン大学をモデル

講座制：正教授を頂点とし、助教授・講師・助手・学生のピラミッド構造

ゼミナール演習による教育

価値観の共有

ドイツにおける教授団ギルドの形成

教授資格試験

異分子のふるい落とし

社会的出自の均質性：プロテスタント・中流市民層

研究領域・研究方法の均質性：外交史

共通の価値観と方法論

歴史学の政治性

保守的自由主義

国内では政治的中立

対外的には国民主義

文化史学と歴史学との葛藤

歴史学の一元主義

19世紀：歴史学とは外交史であった

大学文学部史学科の歴史学と経済学部の経済史・法学部の法制史の併存

内政史や経済史などの排除

これらは歴史学以外の学問領域で研究

経済史は経済学の分野

大学の教員としての地位をすでに有している研究者によって

ブルクハルト：バーゼル大学の教授・美術史の方法を活用・美術や思想の様式的変化を比較し、時代ごとの特質を解明

ランプレヒト：ライプチッヒ大学総長・法則性を重視。中世経済史

ウェーバー：フライブルク大学・ハイデルベルグ大学正教授、経済学

ホイジンハ：ライデン大学総長

ワイマール期

オットー＝ヒンツェ：国家法制史、ベルリン大学政治・国制・行政・経済史教授。妻がユダヤ人、オランダに亡命。

1940年に死去。

ローゼンベルク：ユダヤ人，ドイツ社会民主党員、古代史。アメリカに亡命、ブルックリン大学教授、社会史学派。

1943年死去。

マイネッケ：ワイマール体制支持派。フライブルク大学／ベルリン大学。世界市民思想と民族主義／国家主義との関係を解明。

ナチスの圧力で『史学雑誌』編集者を辞任(1935年)。

1954年に91歳で死去。

沈黙を守るか亡命

文化史論争：ランプレヒト、社会や文化は類型的把握が可能・史料主義を批判

ドイツの全歴史家が反対

一元主義に対する批判

文化史もこの様な潮流の中に位置づけられる

歴史学に対するアンチ・テーゼ

歴史学の多様化

歴史学の主軸の変化

流行・主流の分野の変遷

外交史から社会経済史へ：大塚久雄

社会経済史から社会史へ：阿部謹也

社会史から新文化史へ

ナタリー・Z・デーヴィス：16世紀フランスにおける恩赦嘆願書のフィクションとストーリー、その文化的背景。

カルロ・ギンズブルク：16世紀イタリアで異端として処刑された粉屋メノッキオの特異な世界観と村人の文化。

ル・ロワ・ラデュリ：14世紀のピレネーにあるモンタイユール村で行われた異端審問と村の文化的伝統。

歴史学の本質についての不明確化の進展

【参考文献】

阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男：伝説とその世界』（平凡社）、1974年。

ゲオルク・G・イッガース（中村幹雄・末川清・鈴木利章・谷口健治 訳）

『ヨーロッパ歴史学の新潮流』（晃洋書房）、1986年。

リチャード・J・エヴァンズ（今関恒夫・林以知郎・佐々木龍馬・與田純

訳）『歴史学の擁護 ―ポストモダニズムとの対話―』（晃洋書房）、

1999年。

- 大塚久雄『近代欧州経済史序説』（時潮社）、1944年。
- カルロ・ギンズブルク（杉村光信 訳）『チーズとうじ虫 —16世紀の—
粉屋の世界像』（みすず書房）、1984年。
- ピエール・ショーニュ／フランソワ・ドゥス（仲澤紀雄 訳）『歴史の中
の歴史家 —瞬間が炸裂するとき—』（国文社）、1996年。
- ナタリー・Z・デーヴィス（成瀬駒男・宮下志朗 訳）『古文書の中のフ
ィクション —16世紀フランスの恩赦嘆願の物語』（平凡社選書）、
（平凡社）1990年。
- ピーター・バーク（長谷川貴彦 訳）『文化史とは何か』（増補改訂版）
（法政大学出版局）、2010年。
- ル・ロワ・ラデュリ（井上幸治・渡辺昌美・木居純一 訳）『モンタイユ
ー：ピレネーの村1294～1324』（刀水書房）、1991年。